様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３４０２０６２

研究課題名（和文）２０年後の「日本留学」の意味：インドネシア人日本留学体験者のキャリアから考える

研究課題名（英文）Twenty years after study in Japan: A follow-up study of Indonesians who have studied in Japan

研究代表者
有川　友子（Arikawa, Tomoko）

大阪大学・国際教育交流センター・教授

研究者番号：３０２７１４４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,000,000円、（間接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：研究代表者は2011年度から2013年度の3年間、毎年約1週間から10日間程度、インドネシアに滞在し、日本留学経を持つ元留学生の追跡調査を行った。具体的には1980年代後半から2010年代前半の間に日本留学を経験し帰国した元留学生の語りを通し、多様な留学体験や、帰国後時間が経過する中でのキャリアとの関係を含め、元留学生の立場から捉える日本留学について検討した。更に日本以外の国への留学体験をもつ元留学生の語りも参考にしながら、長期的観点からの日本留学について考察した。

研究成果の概要（英文）：Using an ethnographic approach, this research aimed to clarify the impact of study abroad in a long-term perspective from the perspectives of those who did the study abroad. In particular, this resesarch followed the life and career of those Indonesians who had studied in Japanese higher educational institutions in the past. The researcher interviewed those returnees who had studied in Japan between late 1980s and early 2010s, examing how they reflect on their study in Japan and what and how the impacts of those study abroad were on their life and career. In addition to those who had only studied in Japan, the researcher interviewed those others who had studied in other countries, comparing and analyzing how their study abroad influenced their life afterward from the returnees' perspectives.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育社会学

キーワード：留学　日本　インドネシア　日本留学体験者　キャリア

１．研究開始当初の背景

（１）研究代表者は教育人類学・異文化間教育学を専門とし、文化習得についての研究を行ってきた。具体的にはエスノグラフィックなアプローチにより、日本に留学したインドネシア人留学生について 1990 年代から研究してきた。

（２）上記研究の後、特に理科系大学院において博士号を取得し帰国したインドネシア人元留学生についての追跡調査を 1990 年代後半から 2000 年前後に行った。

（３）当初の研究調査から約 20 年を経た時点で、インドネシア人元留学生について追跡調査をすることで、長期的な観点から留学について解明することにつながると考えるようになった。

２．研究の目的

（１）本研究ではエスノグラフィックなアプローチにより、インドネシア人元留学生が日本留学から約 20 年という長期間が経過する中で、日本留学をどのように捉え、評価しているか、元留学生の立場から解明することを目的とした。

（２）研究代表者の 1990 年代の日本におけるフィールドワークにおいてインフォーマントとなった元留学生を中心にインタビューを行うことで、既に信頼関係のある元留学生を継続して対象とし、日本留学時期から帰国後時間の経過した時点まで、同じインフォーマントの語りを通してみえてくる日本留学の意味を明らかにすることを目的とした。

（３）上記の 1990 年代以来のインフォーマントを通して、他の日本留学経験者や他国で博士号を取得した元留学生等の紹介を依頼し、これらの元留学生へのインタビューを行うことを通して、多様な元留学生の立場から多角的に留学について解明することを目的とした。

３．研究の方法

（１）2011 年から 2013 年まで毎年約 1 週間から 10 日間、インドネシアを訪問し、1990 年代からのインフォーマントである理工系で博士号を取得した大学教員や官庁職員の元留学生を訪ね、現在のキャリアや家族の状況について話を聴いた。

具体的な期間と対象者を以下に記す。

① 2011 年 8 月 17 日―31 日　中部ジャワ大学教員 6 名　日本留学経験者
（1991－1992 年の日本での調査時のインフォーマント）

② 2012 年 9 月 16 日―22 日　ジャカルタ官庁職員 18 名
日本留学経験者、他国留学経験者
（約 25 年前の留学経験者から最近の帰国者まで含む）

③ 2013 年 8 月 17 日―26 日　中部ジャワ大学教員 16 名
日本留学経験者、他国留学経験者
（約 25 年前の留学体験者から最近の帰国者まで含む）

（２）2011 年度の調査では、発表者の 23 年前の日本でのフィールドワーク時のインフォーマントに絞ったが、2012 年度と 2013 年度の調査では、日本でのフィールドワーク時のインフォーマントを通して、官庁や大学に所属する他の日本留学経験者や他国留学経験を持つ博士号保持者を紹介してもらい、日本語もしくはインドネシア語でインタビューを行った。

（３）インタビューにおいては、日本留学の体験、帰国後の状況等について、あらかじめ準備した項目を中心にオープンエンドスタイルのインタビューを行った。

主な質問項目は以下の通りである。

① 現在の仕事（所属、職位、その他の仕事、仕事内容）
② 日本留学（留学時期、留学先大学・大学院、課程・プログラム、奨学金など）
③ 他国への留学（留学先国、大学・大学院、留学時期、課程・プログラム、奨学金など）
④ 留学中の体験（指導教授、研究室、研究室での活動、指導教授等教員との関係、学生との関係、先輩・後輩関係、研究について、学位取得までのプロセスなど）
⑤ 帰国後について（帰国直後、帰国後から現在までの仕事・活動、所属先、その他の活動）
⑥ 日本留学からもってきたもの（博士号、日本留学の捉え方、考え方、価値観、仕事の仕方、同僚との関係、教育研究活動におけること、その他）
⑦ 他国への留学からもってきたもの（留学の捉え方、考え方、価値観、仕事の仕方、同僚との関係、教育研究活動におけること、その他）
⑧ 留学について（日本留学経験者として、留学先による比較、留学時期による比較、学部から留学、大学院から留学）
⑨ 帰国後の海外との関係（出身大学や指導教授等との関係、その他日本との関係、その他の国や地域との関係）
⑩ 留学制度（日本留学と奨学金との関係、過去から現在までの留学制度や奨学金制度について、将来の課題）
⑪ 家族のこと（現在の家族の様子、日本留学時の家族について、日本での生活について、帰国直後、現在まで残るも

の、子どもの将来、留学についての親としての期待、子どもの関心等）

４．研究成果

（１）本研究を通して、留学の長期的なインパクトについて明らかにすることができた。1990 年代からのインフォーマントの中には大学教員として帰国後 20 年が経過し、昇進を続け、教育研究実績をあげていたケースがあった。

（２）帰国後の研究指導活動において、日本の大学院生の時代に体験した研究室システムを活用し、新たにインドネシアのコンテクストにあわせて作っていたケースがあった。元留学生が日本のシステム等において評価する活動を取り入れ、そうでないものやインドネシアのコンテクストにあわないものは取り入れていなかった。

たとえば、学生への指導において、教員と学生と１対１の指導に限らず、日本での研究室のように学生グループを作り、学生間での教えあうシステムを作ったインフォーマントがいた。

ただし、日本留学時代の先輩後輩の上下関係の厳しさの経験をもつインフォーマントの中には、帰国後の学生グループにおいて、学生がお互いに教えあう形での緩やかな関係は作ったが、日本で体験した先輩後輩の関係とは異なることを説明するインフォーマントがいた。

また、定期的に報告会やミーティングを開催し、研究の進捗状況について報告させたり、論文を一緒に検討するケースがあった。

更に、日本の大学院における経験を参考に、新たに学生の居室を作ったケースや、家庭的な雰囲気を作ることの意義を感じ、例えば学生の卒業時に教員と学生と一緒にパーティをするようになったと説明するインフォーマントもいた。

一方で日本留学であってもコースにより、指導教員から個別の指導を受けることが中心の留学生活となり、他の学生との関係については限定的である場合、帰国後の研究指導についても留学先の体験と同じ形で捉え、対応しているケースがあった。

（３）日本と他国の留学経験者から、元留学生の立場から、複数の留学先での体験について比較する中で、元留学生の捉える各留学先の特徴が明らかになった。そして、元留学生が帰国後どのように留学先での経験等を活用しているかについて、明らかになった。

例えば、官庁所属の元留学生の中に、グループやチームで協力して仕事を進めたり、最後まであきらめずにやり遂げる姿勢について、日本留学経験者であれば共通認識があることを指摘するインフォーマントがいた。

また、帰国後も日本や海外とのつながりを積極的に活用して仕事を進めているケースも見られた。仕事の進め方や人間関係も含めて、帰国後のキャリアにおいてインフォーマントの留学の体験が影響していることが明らかになった。

（４）長期的観点からの追跡調査を通して、留学の長期的なインパクトが明らかになった。帰国直後においては、元留学生が数年間の留学中の空白を取り戻し、母国での生活やキャリアを軌道に乗せるために努力していた。その後、10 年単位の時間が経過する中で、各インフォーマントがそれぞれの置かれた状況の中で、留学を通して得た考え方、捉え方、価値、行動等について、それぞれに活かしながら、キャリアをつくってきていることが明らかになった。

（５）インドネシアの高等教育の変化、また高等教育全体のグローバル化が進む中で、日本、インドネシア、それぞれの大学院教育プログラムも変化してきていた。最近の帰国者の中には日本留学において英語コースや国際コースを体験したケースがあった。これらのケースから、各インフォーマントが留学先や研究室においてどのような経験をしたかが、帰国後の日本留学の捉え方や教育研究活動に影響していることがわかった。

このように近年日本の大学院の多様化が進んでいること、それに伴う留学体験の多様化が進んでいることが明らかとなった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

① 有川友子、2014、「インドネシア人元留学生が語る日本留学とキャリア－質的研究エスノグラフィックアプローチを通して考える－」（論考）、『留学生交流・指導研究』、査読有、第 16 号、35－45 ページ。国立大学留学生指導研究協議会。

② Arikawa, Tomoko, 2014, The impact of studying abroad over time and place: A longitudinal study of Indonesians who studied in Japanese higher educational institutions, USLU, Ferit, (ed.), e-Publication, INTCESS14-International Conference on Education and Social Sciences Abstracts & Proceedings, pp. 1526-1533, Feb. 3-5, Istanbul, Turkey. 査読有。

③ 有川友子、2012、「20 年後の「日本留

学の意味」－インドネシア人大学教員の今を通して考える－」（論考）、『留学生交流・指導研究』、査読有、第 14 号、51－62 ページ、国立大学留学生指導研究協議会。

〔学会発表〕（計　4　件）

① Arikawa, Tomoko, 2014, The impact of studying abroad over time and place: A longitudinal study of Indonesians who studied in Japanese higher educational institutions, Virtual Presentation at the International Conference on Education and Social Sciences, Feb. 3-5, Istanbul, Turkey.

② 有川友子、2013、「日本留学の長期的なインパクト（その２）－インドネシア人元留学生の 20 年後のキャリアを通して考える－」、異文化間教育学会第 34 回大会、（2013 年 6 月 9 日）（日本大学）。

③ Arikawa, Tomoko, 2012, “Community of Practice Crossing Borders: The Teaching and Research Practice of Indonesian Professors Twenty Years After Study in Japan,” 米国人類学会年次大会（American Anthropological Association 2012 meeting）（2012 年 11 月 17 日）（San Francisco）（査読有）。

④ 有川友子、2012「日本留学の長期的なインパクト－「研究室」でのインドネシア人留学生の体験と帰国後の活用を通して考える－」、異文化間教育学会第 33 回大会、（2012 年 6 月 10 日）（立命館アジア太平洋大学）。

６．研究組織
(1)研究代表者
有川　友子（ARIKAWA, Tomoko）
大阪大学・国際教育交流センター・教授
研究者番号：30271448